

2025 年度 創造的な教育実践

1. ゼミの武蔵の実践

1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部助教 笠原 一絵

この授業は、2008年度に正規授業となり、今年度で18年目を迎えました。

2025年度は、昨年に引き続き事前に(1月、4月、6月)履修希望者に対して面接を行いました。この面接は、履修希望者を選抜するためではなく、履修に向けた心構えや詳細な授業内容を伝えつつ、履修希望者のやる気を確認するという目的で行いました。なお、例年通り定員より履修希望者が多い場合にのみ、学年や学科のバランスを考慮して選考いたしました。

一人ずつ面接することで事前に学生の様子分かり、チーム編成の際参考になりました。また、ガイドンスでは伝えていますが、改めて授業の大変さを説明することで、履修の覚悟をもてたことは学生にとっても良かったと感じます。また、春学期のフェーズ1とフェーズ2の終わりに履修生にアンケートを取り、秋学期の学生にはその内容を授業開始時に共有しました。チーム活動や課題への取り組みの困難な状況をリアルに認識できるとともに、それをやり遂げて達成感を得たことについて、学生の視点から生の言葉が伝えられたことも効果があったと思います。

(本プロジェクトでは、1セメスターを2つの期間に分け、中間発表までの前半をフェーズ1、最終報告会までの後半をフェーズ2としています。フェーズ1は学部系統ごとのチーム、フェーズ2では学部横断のチーム構成になっています。)

今年度フェーズ1の課題について、経済学部は「課題提供企業が向き合う社会課題と経営との関連性を考える。」を追加しました。また、社会学部は「担当企業については、これまでどのような社会課題に取り組んできたのか、(中略)そして、今ある社会課題を明らかにする。」という課題から「①まず当該企業が向き合う社会課題にどのようなものがあるのかを多角的に洗い出し、1枚の図、あるいは表にまとめる。」という内容に変更し、各学部が課題提供企業の社会課題についてフェーズ1から理解を深めるように努めました。

2023年度から、課題は「CSR 報告書の作成」から「協力企業を取り巻く社会課題への提案」に変更し、協力企業は「1セメスター1社」とし、2チームがそれぞれ同じ企業を研究しました。

そして、2023年度から教員は経済学部、人文学部、社会学部から各1名の3名体制から2名体制となり、2025年度は経済学部とリベラルアーツアンドサイエンス教育センターから各1名が担当しました。そのため、フェーズ1では経済学部と国際教養学部 EM 専攻のチームを経済学部教員が、人文学部と社会学部、国際教養学部 GS 専攻のチームをリベラルアーツアンドサイエンス教育センター教員が担当することにしました。

春学期、秋学期ともに1クラスを開講し、定員は1セメスター20名でした。春学期、秋学期の学部・学科別の履修者数は表1のとおりとなっています。内訳は、春学期は、経済学部が8名、人文学部が4名、社会学部が6名、国際教養学部 GS 専攻1名の合計19名(うち2名は中間発表会後に履修を中断)、秋学期は経済学部が7名、人文学部が4名、社会学部が3名、国際教養学部 GS 専攻が2名の合計16名(履修開始時は20名でスタートしましたが、開始後2週間で4名が履修登録を取り消し)です。男女比を見ると、春学期は男性8名、女性11名(男性比率42.1%)、秋学期は男性5名、女性11名(男性比率31.3%)と、春学期、秋学期ともに女性の履修者が男性を上回る結果でした。なお、今年度は国際教養学部 EM 専攻の履修生はいませんでした。

表1 2025 年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学期・学年・学科・性別)

学科・コース セメスター	春学期				秋学期			
	2年次生		3年次生		1年次生		2年次生	
	男	女	男	女	男	女	男	女
経 済	1	0	0	2	1	1	1	0
経 営	0	1	1	2	0	0	0	4
金 融	1	0	0	0	0	0	0	0
英語英米文化	1	0	0	0	0	0	1	2
ヨーロッパ文化	0	1	0	2	0	0	0	0
日本・東アジア文化	0	0	0	0	0	0	0	1
社 会	0	1	1	0	0	1	0	1
メディア社会	2	2	0	0	1	0	0	0
国際教養 (EM専攻)	0	0	0	0	0	0	0	0
国際教養 (GS専攻)	0	0	1	0	0	0	1	1
学科別・性別合計	5	5	3	6	2	2	3	9
セメスター別学年割合	52.6%		47.4%		25.0%		75.0%	
履修生合計人数	19				16			

履修人数の関係で、春学期のフェーズ1では、2チームの人文学部・国際教養学部 GS 専攻を合同で1チームに、秋学期は同様に2チームの人文学部と2チームの社会学部・国際教養学部 GS 専攻を合同で1チームの構成としました。これは、2023 年度から体制が変更したこと、「1セメスター1社」に変更したことにより、学部ごとの履修人数に偏りが生じても対応できた点です。

今年度から、国際教養学部 GS 専攻の学生には、学部での学びに合わせて人文学部もしくは社会学部の課題どちらかを本人に選んでもらうことにしました。これは、以前から希望制にしてほしいという学生からの依頼があったことにより実施したことです。また、定員が 20 名になりフェーズ1から全てのチームが1つの教室で活動できたことで、履修生と教員の双方にとってフェーズ2への移行がスムーズになりました。

さらに、課題を「協力企業を取り巻く社会課題への提案」にしたことや担当企業の業種から、学生にとって身近な視点からの提案を検討することが可能となり、以前より課題に対して「自分ごと」として取り組めるようになったようです。

今年度も春学期、秋学期ともに全面的に対面での授業(課外活動を含む)を実施しました。SNS を通じて様々な文化や考え方があることを知っているのも、自分とは価値観が違う他者もチームとして受け入れる寛容さが見られたことは、今後にも期待が持てました。

しかしながら、中学や高校時代にコロナ禍で過ごした学校生活(部活動や学校行事への参加、友人との関係構築などが制限されたこと等)の影響や、幼いころからインターネットを利用している影響は非常に大きく、以下のようないくつかの状況が見受けられました。

- ・様々な場面で、教えてもらわないから分からないという受け身な姿勢が目立った
- ・自主的に調査する能力が低く、調査した内容を整理してまとめるなどの基礎的なリサーチ力が乏しい
- ・生成 AI の安易な活用により、思考力が低下している
- ・対人コミュニケーション能力が全体的に低下している(または、対人関係を構築するのが苦手な学生が多い)
- ・経験が少ない、または読書量が相対的に少ない、SNS での短い文章に慣れてしまっている等の理由からか、理解力が乏しい(資料を読み込む力、教員や他者の話を理解する力、等)。そのため、日本語での文章力や表現力も乏しく稚拙である

- ・事前課題や SNS 投稿・社会人基礎力関連等の課題を提出しない、授業外の調査を実施しない、チームワークに参加しない、という学生が数名出現した(学部横断ゼミ開始以来初の状況)等です。

このような状況下で、教員としては、個別面談を増やして学生をフォローしていく工夫をし、教員間の体制づくり等が更に重要になると感じました。

近年の生成 AI の進化により、本授業では良い面と今後さらに検討や注意が必要な点が生じてきました。

良い面としては、学生たちがテキスト入力だけでオリジナルのイラストを作成できるようになり、小冊子の表紙や記事、発表資料等に適宜イラストを使用することで、学生が考えたイメージを的確に伝えやすくなりました。

その一方で、「生成 AI による画像」は著作権侵害になる可能性がある点は今後注意が必要です。また、用語説明のための文章を生成 AI やインターネットから直接引用しているにもかかわらず、出典元を明記しない等、インターネットとの関わりについて、今後さらに注意が必要だと感じました。

一方、今年度は過去の履修生に Teams と SNS の利用方法について、授業開始時にレクチャーしてもらったことは大変効果があり、以前よりは SNS が活発化できたと思います。今後も引き続き授業用 SNS の意義を改めて学生に伝えるとともに、授業用 SNS と Teams を組み合わせた使用方法をさらに検討していきます。

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、「協力企業を取り巻く社会課題への提案」、もう一つが「社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めること」です。表2は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。春学期と秋学期を合わせた期間(通年)における履修生全員の平均値を見ると、受講前(事前評価)と受講後(事後評価)の間で最も伸びた能力は課題発見力でした(1.5ポイントのプラス)。これは、論理的思考や物事を多面的に、かつ深く思考することの重要性を教員が常に伝え、学生がそれに応える形でチームでの思考を深めたことにより伸びた能力と思われます。また、学生自身が悩みながら、時には教員チームからのアドバイスやフィードバックを丁寧に行いながら、様々な課題(チーム活動における課題と、社会課題の内容とその提案、の2つの観点から)を学生自身が発見し解決する力をつけたことで、成長を感じたからと考えられます。

他方、最も“伸びなかった”能力は規律性でした(マイナス0.8ポイント)。これは事前評価の段階で、12項目の中で2番目に高いこと(事前評価で8.3ポイント)に注目しておく必要があります。これは興味深いことに毎年同じ傾向が見られます。学生は、学部横断型課題解決プロジェクト(以下、横断ゼミ)を通して自己と他者の関係性を理解することで「規律性とは本来何なのか」を知るのです。つまり正しく自己評価ができるようになった結果であり、規律性は“伸びなかった”のではないと考えられます。

社会人基礎力は、12の要素に分かれています。大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の3つのカテゴリーに分かれています。この3つのカテゴリーで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、上昇幅も一番大きかったという傾向が見られます。

そして、不測の事態が起こる世に生き「頑張る」ことの価値が伝わりにくい世代と言われる現代の学生が、横断ゼミの履修を通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。

なお、定性評価させている「行動目標」「前半振り返り」「後半振り返り」のレポート課題は、近年の文章力・表現力の低下により学生にとって非常に負担になっていたため、今年度から12の能力要素をそれぞれ2問(各150字以上)のレポートに課題を軽減しました。(以前は3問で各150字以上でした。)

表2 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2025年度履修生】(学生による自己評価)

*表は10段階評価、小数点第2以下四捨五入のため差異が一致しない場合がある。

年度		2025年度		
カテゴリ/要素		事前評価	事後評価	差異(事後・事前)
通年⑫要素平均		7.1	7.7	0.6
1. 前に踏み出す力(通年)		6.9	7.9	1.1
①主体性	春学期	7.7	8.6	0.9
	秋学期	7.8	8.6	0.9
	通年	7.7	8.6	0.9
②働きかけ力	春学期	6.7	7.4	0.7
	秋学期	7.2	7.4	0.3
	通年	6.9	7.4	0.5
③実行力	春学期	6.6	8.0	1.4
	秋学期	6.4	7.4	1.0
	通年	6.5	7.7	1.2
2. 考え抜く力(通年)		5.9	7.1	1.3
④課題発見力	春学期	6.4	8.2	1.8
	秋学期	6.4	7.5	1.1
	通年	6.4	7.9	1.5
⑤計画力	春学期	6.2	6.9	0.7
	秋学期	6.1	6.5	0.4
	通年	6.1	6.7	0.6
⑥想像力	春学期	5.4	7.1	1.6
	秋学期	5.7	6.6	0.9
	通年	5.5	6.8	1.3
3. チームで働く力(通年)		7.5	7.9	0.5
⑦発信力	春学期	7.1	8.5	1.4
	秋学期	7.2	7.8	0.6
	通年	7.1	8.2	1.0
⑧傾聴力	春学期	8.2	8.6	0.5
	秋学期	8.4	8.4	-0.1
	通年	8.3	8.5	0.2
⑨柔軟性	春学期	7.7	7.8	0.1
	秋学期	7.7	7.4	-0.3
	通年	7.7	7.6	-0.1
⑩状況把握力	春学期	6.6	8.4	1.8
	秋学期	7.6	7.5	-0.1
	通年	7.1	8.0	0.9
⑪規律性	春学期	7.7	7.4	-0.4
	秋学期	8.8	7.5	-1.3
	通年	8.2	7.4	-0.8
⑫ストレスコントロール力	春学期	7.4	7.8	0.4
	秋学期	7.9	8.3	0.4
	通年	7.6	8.0	0.4

今年度(2025年度)に課題を提供いただいた協力企業と団体は、春学期が株式会社竹尾、秋学期が生活クラブ事業連合生活協同組合連合会です。ともに2024年度の担当教員からの紹介です。学生たちは、協力企業や団体に対して期待に応えたいという熱意のもと力を結集して取り組み、厳しくも温かい環境に恵まれた貴重な経験を積むことができました。

2008年度の授業開始以降、営利組織である株式会社にご協力していただき授業を実施してきましたが、今期は初めて、非営利組織である協同組合にご協力いただきました。

今年度は予算を計上し、履修生が春学期は本社や物流センターを見学させていただくほか社長インタ

ビューも実現できました。秋学期は生活クラブ東京の会議や物流センターの見学のほか、那須塩原での牛乳工場や酪農家見学、生活クラブ神奈川主催「東日本大震災・復興まつり」など、たくさんの現場を見学する機会をいただくことができました。

このような機会や体験を通して、学生が社会課題に対して興味・関心・理解し、市民としての社会的責任や多様な視点を身に付けることが出来ると認識しております。

協力企業・団体の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高く評価しています。毎年、歴代の協力企業(一部上場企業を含む)による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査では、「学生の皆様からのご質問に回答する中で、自社の事業や歴史について客観的に見つめ直すきっかけになりました。また、社会課題の分析においては、自社の置かれている立ち位置や外部環境について再認識することができ、学びが多くありました。」「SNSを活用している点は「今」を感じさせてもらえました。先生と学生、学生同士、自分を見つめるためには(SNS は)良い仕組みだと思います。」などの回答をいただきました。

また、今年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や受講生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。ゲストとして過去の受講生が登壇し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修学生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である先輩たちから、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒論に発揮できた成功経験が「自分の言葉で」語られました。

ある4年生は、「自分の強みや弱みを客観視できるきっかけとなり、その後の長期インターンシップや就職活動において、冷静に自分自身を見つめながら活動することができた。」と伝えていましたし、また別の学生は、「人と円滑なコミュニケーションの取り方や、チームが進む方向性を考え修正する力を身に付けることができた。学部のゼミ活動でも相手の配慮や他者を信頼することにより、メンバーの主体的意欲を落とさず活動することができた。」と話してくれました。

「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の言葉は親近感と説得力があり、社会人基礎力という指標で内省を深めた共通の経験があるため、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。横断ゼミを卒業した学生達が「横断ゼミを『横のつながり』だけで終わらせるのではなく、横断ゼミ卒業生達による『縦のつながり』を形成していきたい」という趣旨のもと、学生有志団体「学部横断ゼミ Alumni」は積極的に活動しているようです。昨年の「第73回白雉祭」ではブースを出展し、2023年度春学期協力企業オタフクソース株式会社や、2025年度春学期協力企業株式会社竹尾にご協力いただき、「利き紙体験」「折り鶴体験」「ソースアンケート」などの企画を実施しました。特に「折り鶴体験」で折られた約600羽の鶴は、広島市の平和記念公園内にある「原爆の子の像」に寄贈しました。寄贈に至った経緯は、2023年度春学期の履修生たちが当時オタフクソース株式会社の本社見学で広島を訪れた時に原爆記念館も見学し、平和への想いを深めたことによるものでした。学生たちの

横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実に繋がっています。



フェーズ1・経済学部の様子(春学期)



フェーズ2・学部横断チーム(秋学期)

1-2. ゼミナール対抗研究発表大会(経済学部)

経済学部 ゼミ大会 プロデューサー内藤 知加恵・佐藤 宇樹

<2025年度「ゼミナール対抗研究発表大会」の概要>

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会(通称「ゼミ大会」)は2004年の第1回より続いている「ゼミの武蔵」を代表するイベントの1つである。今年度のゼミ大会は2026年1月10日(土曜日)に開催された。

ゼミ大会では、経済学部のゼミから31チームが出場し、6つのブロックに分かれて、20分間のプレゼンテーションと15分間の質疑応答を通して日頃の研究成果を競い合った。また、経済学部部門と併せてチャレンジ(同窓会)枠も設けられ、5チームが出場した。チャレンジ(同窓会)枠は、2017年度に武蔵大学同窓会の提案により創設された発表枠であり、学部・学年や研究分野を問わずユニークな研究に取り組むグループや個人に対して発表機会を設けることを意図している。

経済学部部門の各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された審査員が①発表資料、②表現力、③着眼点、④調査分析、⑤論理整合性、⑥専門知識・先行研究、⑦質疑応答力の7つの観点から審査を行った。各ブロックの審査員は4名から構成されており、うち2名は実務界で活躍している本学OB・OGが担当し、残り2名は本学経済学部の教員が担当した。厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが決定し、それぞれ賞状・賞金が授与された(一覧表を参照)。

ゼミ大会は、出場する学生にとって多面的な教育的効果が見込まれる。発表テーマに関する専門的知識の習得や深化はもちろんのこと、発表の準備段階における学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力が養われる。また、大会当日は実務・社会経験が豊富なOB・OGが審査員を務めるため、プレゼンテーションには実社会への応用性や、より広い対象に理解を促すための能力が要求される。また、大会終了後の懇親会における審査員との交流は、実務家の知見を得る貴重な機会となる。これらから、学生は通常の講義やゼミナール活動だけでは得られない経験・学習の機会を得ることができる。

また本学のゼミ大会は、学生が運営を行っている点に特徴がある。同窓会、職員、教員などのサポートのもと、学生団体である武蔵大学ゼミナール連合会がゼミ大会の企画・運営を行っている。また、大会当日はサポートスタッフとして出場ゼミの学生が運営に携わる。大学の予算と設備を使用することもあり様々な制約がある中、運営にあたっては多くの手続き、文書作成や関係者とのコミュニケーションが求められる。そのため、運営に携わる学生も、社会人として役立つスキルを修得することができる。

<今年度の改善点及び今後の課題>

(1) チャレンジ枠出場チーム数の増加

昨年度同様に、出場ルールに関して、教員ごと1学年から2チーム出場可能とした。その結果、今年度も第2部から2チーム出場したゼミが多く見られた。また、出場チーム数(チャレンジ枠除く)は昨年度と同じく27であった。1チーム5名までという制限も引き続き廃止され、より多くの学生に発表の機会を与えることができるようになった効果が継続しているものと思われる。

(2) 運営体制に関する課題

チャレンジ枠の審査と学外審査員の依頼が、例年よりも遅くなった。これにより、同窓会担当者及び学外審査員への負担増があった。間際のご依頼にもかかわらず快諾いただいた学外審査員の皆様に感謝するとともに、来年度からは可能な限り早い時点での学外審査員依頼手続きが望まれる。また、学内・学外審査員への書類の送付が直前になったことが課題として挙げられる。パンフレットや審査関係書類は

オンライン化の方針をゼミ連は示しており、それ自体は問題がないと思われるが、事前に関係者にお送りすることで当日の円滑な審査につながるだろう。来年度以降の課題となる。1～2年生のみから構成されるゼミナール連合会において、例年、運営ノウハウや注意事項の申し送りが課題となっている。安定的に大会運営をするため、可能な限りゼミ大会担当教員もサポートしていきたい。

<出場チーム、及び発表テーマ一覧表>

ブロック名	担当教員	出場チームの区分	研究テーマ(発表タイトル)	結果
経済A	大野早苗	縦ゼミ A	株主優待が株価に与える影響	
	河合康夫	第2部	ポストコロナのプライダルビジネス	
	阿部景太	第2部	フィニング規制をはじめとしたサメに関する規制実施は、死亡率削減(漁獲量削減)に貢献するのか。	優勝
	茶野努	第1部	訪日外国人の消費行動の分析	準優勝
経済B	大野早苗	縦ゼミ B	工場誘致の経済、波及効果	優勝
	佐藤宇樹	第2部	地域間における幸福度と実質可処分所得の関係性について	
	阿部景太	第3部	日本の排他的経済水域における不法操業抑止力の定量分析	準優勝
	原朋弘	第2部	インドネシアにおける宗教教育と経済効果の関係性分析	
	茶野努	第2部	個人属性より将来選択が鍵<将来設計意識と老後準備の関係>	
経営A	伊藤誠悟	第2部 A	EQ×性格 BIG5	
	鈴木正明	第2部 A	保護犬に対する態度形成	優勝
	山崎秀雄	第2部 A	目標設定の具体性・困難性が計画的な学習行動に与える影響	
	大平修司	第2部 A	100円ショップにおける消費者行動の発生実態とその要因分析	
	内藤知加恵	第2部	大学生の就職活動における企業選好要因の分析—FWA時代におけるZ世代の“働きたい企業像”を探る—	準優勝
経営B	伊藤誠悟	第2部 B	武蔵大学生のキャリアレジリエンス形成要因と本学のディプロマ・ポリシーの相互性	準優勝
	鈴木正明	第2部 B	インフルエンサーのプロモーションと消費者心理	優勝
	山崎秀雄	第2部 B	目標志向とモチベーション・組織からの離脱意向の関係性	
	大平修司	第2部 B	増量・値引きなどのセールスプロモーションの効果は商品の価格に左右されるか	
金融	神楽岡優昌	第2部 A	世界の貨幣が一つになったら	準優勝
	神楽岡優昌	第2部 B	プライベートデットのリスク推定とポートフォリオ効果	優勝
	下川拓平	第1部	アプリ開発と生成 AI	
会計	高橋由香里	第2部	AI導入が会計業務にもたらす影響	
	海老原崇	第1部	自己株式取得による株価の影響	
	海老原崇	第2部	経営者交代が株価に及ぼす影響	
	山下奨	第1部	バッドニュースを抱える企業と決算発表曜日	優勝
	山下奨	第2部	会計とデジタル化 電子帳簿保存法に伴う中小企業の電子化	準優勝
チャレンジ枠	山崎秀雄	第1部A班	上司の寛容さの2つの側面～上司の寛容さが部下の上司に対する信頼感に与える影響～	準優勝
	山崎秀雄	第1部B班	上司のフレンドリーさがもたらすストレス	優勝
	山崎秀雄	第1部C班	授業における座席形態が学習パフォーマンスに与える影響	
	山崎秀雄	第1部D班	組織における適切なコミュニケーションの設計	
	茶野努	金融学科がっかり	金融教育は投資行動に影響を与えるのか?	

1-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部 教授 木元豊

2025 年度の人文学部卒業論文報告会は、1月 26 日(月)の午後に対面で開催された。会場は、英語英米文化学科は 8702 教室(286 人収容)、ヨーロッパ文化学科は 8604 教室(199 人収容)、日本・東アジア文化学科は 8503 教室(257 人収容)だった。本報告書の執筆者はヨーロッパ文化学科の教員であるが、今年度は人文学部教務委員長を務めており、今年度初めて三学科の報告会を横断する形で参加した。学科ごとに特色のある報告会運営がなされていることが強く印象に残った。この点を含め、以下、開催までの経緯や気づき等を記す。

今年度の口頭報告者は、英語英米文化学科4名、ヨーロッパ文化学科5名、日本・東アジア文化学科8名のあわせて 17 名となった。ヨーロッパ文化学科では、当初6名の発表が予定されていたが、1名が欠席となった。また、日本・東アジア文化学科では4年次生の発表に先立って、漆澤教授の基礎ゼミナール所属の1年次生による特別発表「浮世絵をバズらせたい！」が行われた。GSC(英語プログラム)のポスターセッションと発表は、GSCの終了により、今年度からなくなった。

報告者の4年次生にとって本報告会での発表は、自らの卒業論文の顕彰という意味合いがあるとともに、ゼミナール活動の集大成でもあり、卒業論文の内容を簡潔かつ明解に伝えることが求められる。各報告者は、卒業論文ゼミナールの指導教授の推薦をもとに選出される。推薦の基準は、提出された卒業論文の内容が学術的に優れていること、テーマの設定や分析の視点・方法等にとりわけ独創的な点がみられることなどが考慮される。これは、主たる参加者である3年次生が自身の卒業論文と取り組むに当たって、柔軟な思考を獲得する一助となることを期待しての配慮でもある。3年次生は、卒業論文準備ゼミナールの一環として出席必須である。そのほかには報告者の同級生である4年次生など数多くの学生が参加した。学生以外では、論文指導にあたった専任教員だけでなく、ゼミナール等の授業を担当した非常勤講師の姿もあった。

報告会の運営方法は学科ごとに異なる工夫がなされており、特色のあるものだった。英語英米文化学科では、報告者が4名で、発表時間も他学科よりも短い 15 分間に限られており、非常にコンパクトにまとめられていた。学科教務委員によると、これは主たる聞き手である3年次生を疲れさせないための工夫であり、学科教員からも適切な長さであると評価されているとのことであった。発表テーマは、AI を利用した英語学習、移民、日本人の死生観、障害者表象と今日の問題意識に基づくものが多く、英語による発表もあった。質疑応答の時間は全発表終了後に 25 分間設けられているが、今年度の新たな試みとして、質疑応答前の10分間の休憩時間に、3年次生を対象とした Google フォームを利用した質問・コメントの回収がなされた。筆者もこの質問・コメントの一覧を確認したが、各発表者に対して、かなり詳細なコメントがつけられており、3年次生が高い関心をもって発表を聞いたことがうかがえる。

ヨーロッパ文化学科では、資料は6名分用意されていたが、1名が欠席だったため、5名のみの発表となった。発表時間は各自 20 分間で、発表は前半2名、後半3名の二部構成で行われ、各部の終了後にその部の発表者に対する質疑応答時間が設けられた。報告テーマは建築史、歴史学、言語学、ジェンダー研究、政治史などと多様であった。学科教務委員によると、欠席者1名を含めた6名のうちには、GC ドイツ語またはフランス語修了予定の者が4名、ドイツ、フランスの大学への協定留学を終えた者が2名いるとのことで、語学学習や留学に積極的な学生が卒業論文においても良い成果を収めていることが見てとれる。質疑応答は大変活発に行われ、各報告に対して2名から4名の質問が寄せられたようである。報告会終了後も個別に質問をする者もいたそうだ。かつては3年次生に質問させるのに苦労していたのだが、ここ数年この点に変化してきており、今年は特に質疑応答が活発だったようだ。この変化の一因は、発表者の数を減らし、報告時間を短くしたことと、二部構成にし、各部の終わりに質疑応答時間を設けたことにあると考えられる。発表を聞いてから、質問を考える余裕が出てきたのではないかと。

日本・東アジア文化学科では、報告者8名、発表時間は各自 20 分間で、しかも1年次生グループによる30分間の特別発表もあったため、三学科の中でもっとも長時間にわたる報告会となった。3年次生のみならず、4年次生の参加も多かったようだ。発表テーマは沖縄研究、日本文学、韓国ドラマ論・映画論、歴史学、教育学と多岐に及び、韓国語による発表もあった。教職課程の教員を指導教授とする論文の報告もあった。質疑応答は各自の発表後 10 分程度設けられていた。学科教務委員によると、質疑応答は内容に踏み込んだものが多く、同じゼミあるいは教職課程の仲間からの専門的な質問もあったとのことである。他の二学科と異なり、日本・東アジア文化学科では3年次生向けの卒業論文準備ゼミナールと4年次生向けの卒業論文ゼミナールを合併開講しており、ゼミにおける3年次生と4年次生との交流があることが、こうした点にも反映しているのではないかと思われた。今年度は1年次生による特別発表もあり、学科としての一体感が感じられる報告会であった。

どの学科の報告会においても、多くの報告者が紙の発表資料に加えて、パワーポイントも用意しており、それぞれ媒体の特性を活かした発表を行っていた。なかには、QRコードを提示して、オンラインで資料を共有する者もいた。テクノロジーを利用したプレゼンテーション・スキルは着実に上がっているようである。

今年度の口頭報告題目は以下の通りである(当日欠席者分も含む)。

【英語英米文化学科】

- ◇ 生成 AI と音楽を組み合わせた英語学習方略の提案
- ◇ Sustainability of Immigration Policies in the United Kingdom: Economic, Social, and Environmental Perspectives
- ◇ 無宗教と言われる日本人における死生観——輪廻転生か天国と地獄
- ◇ 「見せ物」から「スター」へ——親指トム将軍の成功とバーナムの演出戦略

【ヨーロッパ文化学科】

- ◇ ヴィオレール＝デュク再考——構造合理主義と近現代におけるゴシック建築
- ◇ ウージェーヌ・ドラクロワ《民衆を導く自由の女神》——女性として描かれた自由
- ◇ アルジェリア人のアイデンティティ——植民地の記憶
- ◇ フランス語前置詞句 à l'avance に関する意味論的考察——構築主義に基づくアプローチ
- ◇ 東ドイツの女性政策の再検討——転換期における『フェア・ディッヒ』誌に見る批判的言説を通して
- ◇ 戦後ドイツにおける「過去の克服」とイスラエル・パレスチナ問題

【日本・東アジア文化学科】

- ◇ 【特別発表】浮世絵をバズらせたい！
- ◇ ゴールドコーストにおける沖縄コミュニティの若者と沖縄アイデンティティについて
- ◇ 大江健三郎における外交兵の表象
- ◇ < 応答せよ 1998 > の物語構造と路地を通して形成される新たな家族形態
(原題はハンゲルで記載)
- ◇ 『一遍聖絵』に見る関寺——絵巻と大地に刻まれた声を聞き出す
- ◇ 樋口一葉『大つごもり』論——貧困の中で生きる女性
- ◇ ヤン・ヨンヒ映画論——在日コリアンの現実と心情
- ◇ 現代日本刀剣観成立史——武士象徴説の形成過程
- ◇ 古典教育の歩みと現代的意義

以上

1-4. シャカリキフェスティバル(社会学部卒業研究発表会)

社会学部 菊地英明(シャカリキフェスティバル運営幹事代表)

1. 今年度の実施報告

シャカリキフェスティバルは、社会学部の学生による卒業研究(卒業論文・卒業制作・GDS コースの卒業活動)の成果を発表する祭典であり、2009 年度より毎年1月末に開催されてきた。「シャカリキ」には「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味が込められている。また、「祭典」であることに鑑み、発表への優劣はつけず、互いの努力の成果を称え合うこととしている。

発表者は、すべての4年ゼミから1名ずつ(卒業制作・卒業活動の該当者がいる場合、さらに1名ずつ)選出される。第 17 回となる今年度は1月 26 日(月)に、25 点の卒業研究報告(卒業論文 22 点、卒業制作3点)を、5つの会場(1001・1002・1101・1201・1203 教室)に分けて実施した。

シャカリキの目的の一つは、3年生以下の学生を卒業研究実施に向けて動機づけるところにある。社会学部では卒業研究が必修であるが、下級生には、卒論等を自分も出来るのか不安を感じる者が毎年それなりにいる。シャカリキはこのような不安の解消というニーズに応えてきた。

ただし、シャカリキは、ゼミの代表による、優秀な卒業研究の披露の機会としての側面がある。このことはともすると教員の意図とは逆に、自分との縁遠さや無力感を学生に植えつけかねない。

そこで実際の運営では、参加者を「お客様」にしないための様々な工夫を行ってきた。第一に、部会の編成や参加の方法等である。卒業制作は独立した部会としてシアター教室(1002)で開催し、卒業論文は極力似たテーマの報告で部会を組織するよう努めている。3・4年生には出席義務を課すものの、どの部会に出席するかは各自の興味に応じて選択可能としている。

第二に、多くの学生が発言できるような包摂的な雰囲気醸成である。外部へは原則非公開として参加者への心理的負担を減らすこと、部会数を増やして聴衆の規模を極力小さくすること、教員への事前の「司会の心構え」の周知などがあげられる。

第三に、結果だけでなく過程も、成功だけでなく失敗も見せることである。特に発表後の質疑応答の中で、苦労話や失敗談の共有や後輩へのアドバイスに時間を割く部会が多く見られる。

第四に、表彰式を兼ねた懇親会の実施である。今回、コロナ禍の収束や会場となる2号館「武蔵ダイニング」の落成により、2020 年1月以来久々に盛況のもとで実施できた。有償ボランティア学生の協力を得、ケータリングサービスを利用し軽食とソフトドリンクを提供し、記念撮影も実施した。

2. 今後に向けて

シャカリキは、経済学部「ゼミ大会」(ゼミ対抗研究発表大会)に相当する社会学部独自のイベントとして構想された。「ゼミの武蔵」という理念は学部を超えて共通するものの、その運営はゼミ大会と多くの点で異なる。これは社会学部でのゼミの成果の集大成が、個人単位の卒業研究(卒業論文・卒業制作・卒業活動)であるという特性に基づいているところが大きい。

社会学部で個人単位の卒業研究を必修とする限り、今後も同様の企画は続くと思われるが、いくつかの課題も見られる。第一に、1・2年生の参加者の少なさである。3S 等を通し、積極的な参加を呼びかけているものの、今年度の参加者(コメントシート提出者)は 10 名に満たない。第二に、学生主体の運営への移行である。現在、数名の有償ボランティア(今年度は懇親会運営に従事)を除けば、教員3名からなる実行委員会が運営している。シャカリキフェスティバルはほぼ同じスタイルで長年続いてきたが、これらの課題をクリアするために、それにふさわしい形でバージョンアップすることを模索する時期にきていると思われる。

2025 年度 第 17 回シャカリキフェスティバル〔社会学部卒業研究発表会〕

A 会場(1001 教室):卒業論文

13:00～13:10	開会宣言・アナウンス		
13:10～14:55	A-1部会 司会:安藤丈将	閑製駿介(松井隆志)	被体罰経験者の肯定的意識と正当化する論理
		豊岡菜浦(垂見裕子)	貧困と不登校の関連—ソーシャルボンドに着目して—
		神田愛瞳(菊地英明)	W.Co あうんにみる市民後見活動の持続可能性—世代を繋ぐ共同の在り方を考える—
14:55～15:10	休憩		
15:10～16:25	A-2部会 司会:垂見裕子	三田泰誠(アンジェロ・イシ)	オーストラリアの移住者・留学生の移住戦略と経験 —メルボルンを中心に—
		朴木崇浩(安藤丈将)	ヤマビルの「死」がつなぐ人間との関係性——ヤマビルを自らの手で殺す意義とは
16:25～16:30	総括・閉会の辞		

B 会場(1002 教室(シアター教室)):卒業論文・卒業制作

13:00～13:10	開会宣言・アナウンス		
13:10～14:55	B-1部会 司会:菊地映輝	原菜々美(奥村信幸)	エコミーマニアニッポンをみつける場所で(卒制)
		牛田敬人(南田勝也)	ストリートファッションの社会学×ロックミュージック(卒制)
		池田暖望(アンジェロ・イシ)	One:海外から来日する留学生のためのガイドブック(卒制)
14:55～15:10	休憩		
15:10～16:25	B-2部会 司会:庄司昌彦	杉山紗雪(粉川一郎)	AIによる生成コンテンツに対する SNS ユーザーの反応と倫理
		伊藤涼介(千田有紀)	BeReal 流行の理由—Instagram との比較を通して—
16:25～16:30	総括・閉会の辞		

C 会場(1101 教室):卒業論文

13:00～13:10	開会宣言・アナウンス		
13:10～14:55	C-1部会 司会:林玲美	日橋映弥(中西祐子)	テレビ CM に映るジェンダー表象—日本社会に根付く性別役割分業意識とその変遷—
		柴田悠(宇田川敦史)	SNS 上の男女論争と異性認識の変容—X(旧 Twitter)における性別役割意識及び嫌悪感情の強化を中心に—
		池亀廉(奥村信幸)	「日本型ファクトチェック」の課題とは—2025 参議院議員選挙での事例検討を通して—
14:55～15:10	休憩		
15:10～16:25	C-2部会 司会:宇田川敦史	熱海紗(福沢愛[針原素子])	「推し活」の普及が与える自己表現への影響
		早川莉央(人見泰弘)	アイドルの「推し活」が若い女性にもたらすもの—アイデンティティ・他者との関係・生活圏への影響—
16:25～16:30	総括・閉会の辞		

D 会場(1201 教室):卒業論文

13:00～13:10	開会宣言・アナウンス		
13:10～14:55	D-1部会 司会:苔米地なつ帆	千葉陽向(大屋幸恵)	なぜ日本人は類型論を好み、キャラを演じるのか—MBTI 診断から考察する相互行為と自己の多元性
		宮武未侑(石川由香里[林雄亮])	同居・非同居別にみる若者の「大人である」意識と自立要素の違い
		工藤明依(澤海崇文[針原素子])	失恋ソングを介したオンライン感情共有の効果—匿名的感情共有とストレスコーピングの関係—
14:55～15:10	休憩		
15:10～16:25	D-2部会 司会:林凌	加藤采佳(内藤暁子)	都会と田舎では外見意識の違いはあるのか—東京都と青森県から見る—
		佐川遥悠(曹慶鐘)	高校野球における甲子園の象徴性に関する分析—コロナ禍の大会中止を事例に—
16:25～16:30	総括・閉会の辞		

E 会場(1203 教室):卒業論文

13:00～13:10	開会宣言・アナウンス		
13:10～14:55	E-1部会 司会:千田有紀	新田夏奈(矢田部圭介)	「アイドル VTuber」の魅力とファンとの距離感——「ガワ」から滲み出る本人性とライブの「祝祭性」による「距離の近さ」
		千明さくら(庄司昌彦)	若手芸人のポッドキャスト番組はファン心理／ファン行動にどのような影響を与えているのか
		八代陽菜(山崎哲哉)	スポーツ選手のアイドル化に関する社会学的考察 —日本のプロ野球に注目して—
14:55～15:10	休憩		
15:10～16:25	E-2部会 司会:矢田部圭介	中原壮梧(南田勝也)	日本のライブ空間における「空気」と規範構造
		愛場美羽(林玲美)	空間利用の掟がどのように構築され、変容するのか—「ベーカーリーカフェ・クレール」(仮名)のエスノグラフィー—
16:25～16:30	総括・閉会の辞		

1-5. Capstone Project Symposium

国際教養学部 黄 耀偉 (Capstone Project Symposium 担当)

Capstone Project とは、国際教養学部において4年間の学習の集大成として、最終学年の1年間をかけて取り組む研究プロジェクトである。EM (Economics and Management) 専攻では、経済・経営・政治等の分野から各自が研究テーマを設定し、所属ゼミの Academic Supervisor (指導教授) の指導のもと、自主的に卒業論文の執筆を行う。一方、GS (Global Studies) 専攻では、従来型の学術論文に加え、アートや映像作品、エッセイや小説などによるポートフォリオ制作、さらには社会課題の解決を目的としたアドボカシー・キャンペーンの企画・実施という三つの形式から選択することができる。これらのプロジェクトは、Academic Supervisor 及びゼミ生との対話を通じて進められ、創造性と主体性を育む学修プロセスとして位置づけられている。

国際教養学部では、これらの Capstone Project の成果を広く共有する場として Capstone Project Symposium を実施している。2022 年4月に新設された同学部にとって、本年度は初の Symposium 開催となり、2026 年1月 29 日 (木) にすべて対面形式で実施された。

GS 専攻の発表は、8号館8階 50 周年記念ホールにて行われ、前半にポスターセッション、後半に口頭発表が実施された。ポスターセッションでは、論文提出者のうち 31 名が、事前に自身の研究内容を A1 サイズの英語ポスターにまとめ、当日は午前 10 時 30 分の開始に向けて会場設営及び掲示作業を行った。来場者がポスターの前で足を止め、発表者が主に英語で、質問内容によっては日本語も交えながら応答する姿が、会場内の随所で見られた。口頭発表では5名の学生が登壇し、それぞれの研究成果を発表した。

EM 専攻では、8702 教室において、選抜された学生による研究発表会形式で実施され、今年度は5名の学生が発表を行った。各発表は 15 分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答で構成され、学生たちは日頃の研究成果を簡潔かつ論理的に提示した。

本 Symposium における発表は、卒業を控えた4年次生にとって、自ら執筆した卒業論文の成果を公に示す機会であると同時に、ゼミナール活動の総括としての意味も有している。発表者は、Capstone Project Seminar の指導教授による推薦をもとに選出され、提出された論文の学術的水準の高さや、テーマ設定や分析視点・方法の独創性などが選考基準として考慮された。これは、1～3年次生が今後自身の卒業論文に取り組むにあたり、多様な発想や研究アプローチに触れる機会を提供することも意図している。

当日は多くの3年次生が参加したほか、発表者と同学年の4年次生、2年次生など、多数の学生が来場した。学生以外にも指導教授をはじめとする専任教員が出席し、各専攻会場はほぼ満席となった。限られた発表時間の中ではあったが、研究の要点を的確に伝えるための工夫を凝らしたプレゼンテーションが行われ、活発な質疑応答が交わされるなど、学部・専攻として初開催となる Symposium にふさわしい、充実した報告会となった。今年度の口頭発表の題目は以下の通り。

【GS 専攻口頭発表題目一覧(English)】

- The Portrayal of Happiness in Andersen’s “The Little Mermaid” and Its 1989 Disney Adaptation
- Where were the non-white Riot Grrrls? The Reality of the Feminist Punk Music Scene
- Negotiating Japanese Identity: Challenges Faced by Returnees
- Written Report for Advocacy Campaign: Gender Disparities During Natural Disasters in Japan
- Tackling Political Corruption through the Judiciary: A Cross-National Analysis of Judicial Efficiency

【EM 専攻口頭発表題目一覧】

ゼミ名	タイトル
鈴木ゼミ	損失回避・減益回避と実体的裁量行動 —裁量的費用及び研究開発費削減による利益調整の実証分析—
古瀬ゼミ	知育玩具を扱うビジネスの基本戦略の分析及び日本市場での販売方法の模索 レゴの事例研究
鈴木ゼミ	為替ボラティリティが企業の業績に与える影響
東郷ゼミ	日本における実質賃金と労働組合組織率の関係 —1970年以降の実証分析と1990年代後半の構造変化—
古瀬ゼミ	勝敗の不確実性が観客動員需要へ及ぼす影響:MLB におけるデジタル・ブランド力の検証

以上